

2012 年度第 1 回物学研究会レポート

「明珠在掌——環境共生から生まれる新たな価値」

アレックス・カー 氏

(アジア文化研究家、著述家)

2012 年 4 月 2 日



BUTSUHOAKU  
物学研究会  
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

アレックス・カーさんの著書『「日本ブランド」で行こう』の中に、こんな一節があります。

「日本は中国大陸の近くにある一つの島で、それは日本にとって何なのかというところに戻ればいいんです。日本には日本だけのもの、中国にはないものがあるんだから、それは何だろうということから日本のブランドが始まるのでしょね」

長年のアジア文化研究から導き出されたアレックスさんのメッセージの一つです。

4月の物学研究会は、アレックス・カーさんを講師に、ダイバシティ・マネジメントの初回に相応しく、アジアの文化、自然の中の日本という視点から、日本の文化、デザインの可能性と提言をいただきました。

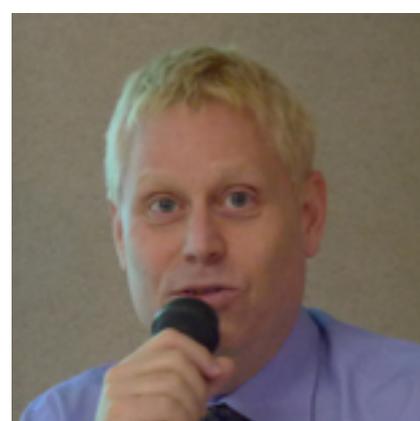
以下、サマリーです。

## 明珠在掌

### ——環境共生から生まれる新たな価値

## アレックス・カー 氏

(アジア文化研究者、著述家)



01 : アレックス・カー 氏

## 0. 自己紹介

こんばんは。本題に入る前に自己紹介をします。私は 1964 年、東京オリンピックの年に初めて日本にきて、横浜に住みました。その後、一度アメリカに戻ったのち、1 年間の慶応大学留学、エール大学卒業などを経て、1977 年に再び、来日しました。京都郊外の亀岡という町にある「大本」という神道系の教団に就職したのです。「大本」では、外国人に日本の伝統芸能を教えるプログラムの運営に 20 年間携わりました。そのころは、比較的自由時間があつたので東京や京都、奈良などを訪れ、歌舞伎や書道、古美術など、様々な日本の伝統文化に触れることができました。亀岡では気に入った家が見つかったので、今も住み続けています。

日本文化のなかでも一番好きなのが「家」です。来日したばかりの 12、3 歳の頃、母親が「なでしこ会」という国際的な婦人会に入り、だいたい 2 週間に 1 度、立派なお屋敷に集まって昼食会などをしていました。私も一緒に行き、日本の古い家の造りに接してとても感動しました。玄関には広い土間があり廊下を歩いて奥へ行くと、また廊下がある。夏には開け放たれたふすまや障子の隙間から部屋の中が垣間見える。最後にお座敷に入ると、広い窓から中庭が眺められる……。どこか俗世間から離れたような、そんなところに惹かれました。木や瓦などの素材も好きでした。

さて、今日は全部で4つのお話を用意してきました。ここからは、本題に入る前の背景としての話になります。この数十年、私が好きな日本の古い家がどんどん取り壊されています。一度壊したら二度と戻ってこない大切な文化財なのに、東京でも地方でも、京都の町家だって例外ではありません。古い家イコール暗い、不便、汚い、貧乏、文明的ではないという意識が、多くの人々の心に深く根付いている。地方に行けばいくほど家を大事にしていない。プライドもなく、むしろ恥と思っているようにも感じます。

もうひとつ、日本では山や川がコンクリートでどんどん固められています。それが文明的で経済的にも発展的であり、昔のままの美しい自然や文化的な街並みは経済的な発展に反するものとされています。私はずっと不動産関係の仕事をしてきましたが、日本では「美しくしよう」は禁句。それはロマンの世界で、それよりも道路建設や工場誘致のほうが経済発展や地域再生になるから重要、なんですね。

これまではそれでよかったかもしれませんが、今後、観光業がもっと重要になると話は変わってきます。ヨーロッパの農村や漁村は過疎と戦う中で、観光によって地域社会をつくってきた歴史があります。一方、日本は少子高齢化が深刻なのに、残念ながら観光は最近まで軽視されてきました。それよりも、経済大国である日本は製鉄や自動車、カメラといった「モノをつくるのが重要だ」という意識が強かった。いえ、今もそうです。

世界全体では、観光業は飛躍的に成長し、特に外貨稼ぎの面からみると、車やIT、石油よりも大きな産業になっています。でも、日本はかなり遅れをとっていて、日本に来る外国人観光客の数は世界で32位。これから観光がとても大事になったときに、「美しい」「自然がある」「文化がある」などが、地方の生死をきめるポイントになってくるはずですが、ロマンとか時代遅れとか云っている場合ではありません。すぐにも対応が必要です。では、そんなことを背景に本題に入りましょう。

## 1. 景観マネジメントの「先端技術」

「観光立国」という表現を最初に言い出したのは小泉元首相で、それ以後、地方でも考えられるようになりました。3年前には観光庁もできました。日本には観光資産がたくさんあります。阿蘇の山や三重県の棚田・・・バリ島でもこんなきれいな棚田はありません。人工的な仏像や寺社もすばらしく、三十三間堂、龍安寺石庭などは世界的にも貴重です。道後温泉などの温泉街も外国人には憧れの的。現代的な建築物もいろいろあります。

ただ残念なのはほとんどがミスマネージをしていて、十分に活用されていません。東京や大阪など大都市にいるとあまり感じませんが、地方都市はシャッター街という恐ろしい病に罹っています。精密機器や医療開発の分野と同様に、景観マネジメントにおいても「技術＝テクノロジー」があることを、今こそ理解しなければなりません。

しかし、残念ながら、日本は世界と比較して相当の遅れをとっています。例えば、電線の埋設です。先進国で埋設工事が済んでいないのは日本だけ。最近ではアジアや南米やアフリカなどでも進んでいるのに、日本は丸の内など一部の地域だけです。観光地の京都でも三十三

間堂の正面や清水寺、また旧市街にある「姉の小路」は協会をつくって町おこし事業に取り組んでいますが、ちょっと目線を上げると電線が張り巡らされています。

高压電線の鉄塔と携帯電話の基地局はヨーロッパでは一カ所にまとめるという規制があり、アメリカのカリフォルニア州でも規則により、数社のプロバイダーがひとつの基地局を共有しています。でも、日本では山の斜面に何十塔と建ち並んでいます。景観も効率も関係なく好き勝手につくっている無法地帯です。

それから、看板やサインの規制も日本ではほとんどありません。京都が初めて景観条例で看板規制に踏み出しましたが、マクドナルドの赤い看板をワインレッドに変えたくらいで、ほとんど効果なし。いまだに京都駅の新幹線ホームから広告用の大きな看板が見えます。神社の鳥居や境内にも、「写真撮影禁止」「火気厳禁」などの看板が並び、景色が汚染されています。看板イコール経済発展という意識が根強くあるのだと思います。

でも、本当にそうでしょうか。例えば、観光地として名高い大分県の湯布院では以前、駅を降りるとその真ん前に銀行の大きな看板がありました。そこで、地元の団体が立ちあがり、看板の位置を低くして目立たないようにしてもらったのですが、そのせいで銀行が倒産したとか、客離れが起こったということは聞いていません。今や看板のマイナス効果を考えなければならない時代になっています。

2004年には、立川市のマンション建設で、景観運動が活発になったことが一つのターニングポイントになり、ようやく景観法ができました。これによって行政指導ができるようになり、例えば、熊本県の黒川温泉など、少しずつ成功例が出てきています。

## 2. 美しい景観を破壊する土木工事

ここからは「土建国家」というテーマで公共事業の話をしていきます。日本は1960年代から、過疎が始まった地方の経済基盤を強固にするため、国策としてインフラを整備し、補助金や雇用を創出するという構造が生まれました。ある時期はそれでよかったのですが、今は逆に足を引っ張っています。私が子どもの頃はたしかに道路整備が必要だったかもしれませんが、いまだに毎年、膨大な予算が道路やダム、新幹線整備などに使われている。時代が変わりニーズに合わなくなった今でも体制を変えられず、永遠にやり続けなければいけないという現状が、日本にはあるからです。

私が2002年に出した『犬と鬼』という本の中に統計データをかなり入れましたが、土木関係に携わっている人口はヨーロッパの約10倍、1年に使うコンクリート量はアメリカの30倍です。これらは国土にどんな悪影響を与えているでしょう。例えば、亀岡にある私の家の周辺は、ビジットジャパンのポスターになったくらい美しいです。でも、ちょっと視野を広げると、斜面がところどころコンクリートで補強されています。メディアで取り上げられた諫早湾の埋め立てや矢ッ場ダム以外にも、こうした小規模の工事は日本全国で無数に行われています。

もう一つ、道路や護岸工事の方法にも大きな問題があります。ヨーロッパでは、いかに小規模で自然への影響が少ないかが技師の腕の見せどころになっています。一方、日本では護岸のコンクリートに岩の模様を付けるような余計なことをしたり、人をあっと言わせるほど大規模に行うかが役所のプライドのようです。

例えば、すでに海岸の6~7割に敷き詰められたテトラポット。景観のことを考えるなら、少しでも小さく目立たなくしようとするはずなのに、逆にアートのような奇抜な形にして醜悪さを強調しています。これはデザインの意味をはき違えているとしか思えません。これでは、日本全土がひとつの前衛彫刻になり変ってしまいますよ。

道路建設でも、自然を切り開きコンクリートで固める方法を続けています。こういうものは欧米ではもちろん、中国やマレーシアでも造れなくなっているのに、日本ではなぜ許されるのか不思議で仕方ありません。

以前の日本はこうではありませんでした。例えば、100年前に造られた対馬の運河は自然に優しい造りです。四国の徳島県にある旧祖谷街道は80年くらい経ちますが、崩れてもいないし、この先何千年でも問題なさそうです。

景観破壊は土木工事だけが原因ではありません。杉植林も悪影響ばかりです。まずは、旧農林水産省の借金。植林は木材が輸入できないという理由で始まりましたが、今は90%を輸入に頼っているため、植林事業はJRよりも大きな借金を抱えてしまいました。また、花粉症も、森林の砂漠化によって動物が人里の農産物を荒らすことも、さらには植林によって山の土砂が流れ、川には土砂ダムが必要になり、海岸の浸食も進んでテトラポッドが必要になるという悪循環……。すべて植林が原因です。

これだけマイナス面があり、プラス面は限りなくゼロに近いのに、日本の山の6~7割が植林されてしまっているのは、日本の役所にはオンボタンはあっても、オフボタンがないからです。毎年予算がつき、それが杉協会や林組合などの天下り先に入るといって、何十年前に決まった一つのシステムが、時代のニーズに関係なく、毎年そっくり続けられている。オフボタンがないから前に向かっていくだけなのです。

もうひとつ大きな問題は、このように何十年も山や川を粗末にした結果、みんなが無関心になってしまったことです。「またできたか」と思うくらいで、「これはおかしい」「やめよう」と手を挙げる人が誰もいない。デザイナーや文化人はもちろん、地元住民やメディアも何も言いません。

### 3. 観光にも重要なテクノロジーの活用

観光産業も古い感覚のままのところがたくさんあります。でも、時代のニーズに合わせ、やり方を考え直す時期にきています。例えば、岐阜県の白川郷は年間240万人が訪れていますが、平均滞在時間は40分だそうです。写真1枚撮る、自動販売機でジュースを1本買う、トイレに行く、それだけ。つまり、駐車場のオーナーにお金が回るだけで地元には還元され

ていません。観光事業としては大失敗。文化的景観の破壊にもなったというマイナス面さえあり、ユネスコは世界遺産の危機遺産リストに入れようと考えているそうです。

日本ではとにかく、奇抜なものを造ろう、大きな駐車場を造ろう。なんとか館、ホール、タワー、そういうものがないと客がきてくれないということになっています。でも、まずは客が何を求めているかを考えることが大切です。例えば、パリではルーブル美術館やノートルダム寺院を見ればほとんどの人には十分で、あとは路地を歩きながらパリの空気を吸うのがパリのロマン、魅力なのではないかと思います。

それと同じく、京の町家の虫籠窓とか、亀岡の家の白壁や納屋などに、本来はなんともいえない心の安らぎや温かさを感じるものです。こういうものがある所こそ、観光的に強みがあると思います。でも、重要文化財や世界遺産は放っておいても国が面倒見てくれますが、こういうものは何もしないとあっという間に消えてしまいます。残すために努力する必要があります。

一例を紹介します。2007年、広島県福山市の鞆の浦で、一つの裁判が行われました。遣唐使時代からの歴史が残る、江戸時代最後の港ですが、「古臭い、時代遅れ、不便。だから、埋め立てよう」という意見が出て、それに対して反対運動が起こったのです。裁判の結果、「景観は日本国民の財産であり、地元の行政などが勝手に壊してはいけない」という画期的な判決が出ました。

こちらは福井県の若狭湾にある町。遠くに家がいくつか見えるだけで、見渡す限り田んぼです。ビニールハウスや看板、鉄塔など人工的なものは一切ありません。また、岡山県の新庄村も奇跡的に残った昔の宿場町。おとぎ話のようなかわいい村です。三重県の瀬峡は私が最も愛している景観で、奇跡的にこれまで工事などは一切入っていません。こういう場所を、どうがんばって次の世代に渡すか。これからの日本の課題でしょう。

## 4. 日本再生プロジェクト

### ・徳島県祖谷

後半は、私が関わっている再生プロジェクトをご紹介します。まず、徳島県の祖谷についてです。場所は四国の真ん中。山はそれほど高くないけれど、傾斜が厳しく、日本のグランドキャニオンと呼ばれています。溪谷が深いので田んぼは一つもなく、昔はソバやミツマタ、タバコなどしかできない土地でした。1971年、私がエール大学時代にヒッチハイクで日本を一周した際に祖谷を発見したときには、そこはすでに過疎の町で、険しい山の上に萱葺き屋根の民家がたくさん残っていました。その光景はまるで仙人の世界のようで、すっかり好きになってしまいました。

そこで、100軒ほど空き家巡りをして、気に入った1軒を1973年、20歳のときに買いました。土地は38万円でしたが、元禄時代から300年の歴史をもつ家の価値はゼロ、無料でした。屋号は「籠庵(ちいおり)」にしました。漢和辞典で見つけた横笛という意味の籠(ち)という字に、庵(いおり)で、笛の家という意味です。以来、その家を囲んでいろいろな活

動をしています。

大邸宅ではなく、日本のどこにでもあった農家ですが、特徴はタバコの葉をつるして囲炉裏の煙で乾燥させるため天井が張られていないのと、煙でいぶされて床から梁まで真っ黒なところ です。

家具は何もなかったの で、私が京都から持ちこんだり、現地で買いました。当初は道路がなく、麓から1時間も歩いて登り、運び込みました。ただ基本的に物はあまり置かないようにしています。私はアートコレクターなのでいろいろ置いてみたけれど、この空間は物を拒否する。結局、行燈以外は合わなかったの で、ピュアな空間になりました。

こういう家は一度壊すと二度と元に戻りません。だから、私は修理しながら使っています。この写真は2年前に屋根を少し直したときの写真ですが、修理作業にはいつも多くの人 がボランティアで関わってくれます。これが、「なんでもないことの魅力、良さ」です。計り知れないパワーがあります。

少し大事な話をします。日本がなぜ、古い家を残すことに失敗したのか。それは資料館的感覚でやってきたから です。文化庁や行政が、なんとか館、なんとか屋敷など資料館として残すケースは、人が生活することを前提としていません。一方、ヨーロッパでは、外観の古い部分を残しながら、屋内はちゃんと修理して、現代人が快適に使えるようにしています。それが今の時代まで家や文化が残ってきた理由です。

私の簾庵も今、大改修中 です。床下には床暖房を入れ、水周りやガス、電気工事もすべてやってから、元々の黒光りした板を使って元通りの景観に戻す予定です。傾いた土台も上から吊るして直し、屋根も萱を葺き直します。完成は6月末の予定。快適な住まいに生まれ変わります。

## ・京都の町家

私は古民家再生のプロデュースをしています。日本にはすばらしい古民家が残っていますが、ほとんど無差別に壊してしまっているのが現状。とても残念です。例えば、ヨーロッパやバリ島、サンフランシスコなど世界の主要観光地では再生した古民家を観光客に別荘として貸す、レンタル・ヴィラが産業として成り立っています。

同じようなことを日本でもできないかと考え、2004年に会社を興して始めたのが京町家の再生事業です。2年前にやめるまで10軒再生しましたが、始めた当初は「日本人は古い旅館よりもホテルを好むから、うけない」と言われました。

でも、フルサービスのホテルや旅館って、やっかいなところがあるじゃないですか。だから私は、一棟貸しにしてカギを渡し、あとは自由に使ってもらう形にしたんです。最初は大変でしたが、しだいに口コミや報道などで広まり予約でいっぱいになりました。意外とニーズがあったんです。一時的にしても、家の主としてこの町に住んでいる、そういう楽しみがあるのです。

再生の内容を少し紹介します。伝統的な京町家には虫籠窓や床の間、吹き抜けや坪庭などがあり、何とも言えず趣があって不思議な魅力があります。でも、「古い家は快適でない」という先入観があります。たしかに現実的にはそうです。これだけ町家が好きな私でも、昔の家そのままには住めません。汚いし、寒いし、トイレはホラー映画。現代人には無理です。

だから、現代の生活感覚で造り変えます。もちろん、家が本来もつ魅力を壊さないようにしながら、見えない部分はほとんど工事します。腐っている土台を直し、水周りも改修し、京都は底冷えしますから床暖房を入れて、照明も明るくしました。

現在は、祖谷にある落合という集落の町家の改修事業に関わっています。江戸時代の建物が18軒も残っていて、重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けています。京都と同じように、断熱材を貼り、床暖房を入れ、水周りを整備したあと、元の骨組みをいかして萱葺き屋根を葺き直しました。3月いっぱい完成し、4月1日から営業開始しています。5月にはあと2軒完成予定です。

#### ・長崎県小値賀町

最後は長崎県小値賀町の話です。五島列島の北部にあり、佐世保から高速フェリーで2時間ほどにある離島です。隠れキリシタンの島でしたが、今は過疎で大変です。約8年前に発見して、私はとても気に入って、研修会などを何度か開催したことで地元とのつきあいができ、町再生を手伝うことになりました。

町は二つの島に分かれていて、本島の小値賀島は緑豊かで、田んぼも牧場も漁港もあります。もう一つの野崎島は岩だらけで、昔は隠れキリシタンがいたため野首天主堂が残っていますが、今は無人島です。国はまとめて世界遺産にしようと言っているほど、とてもきれいな海岸と昔の町がそのまま残っています。シーンと静かな町の中をシカが歩いたり、神秘的な景観が広がっています。

でも数年前、小値賀島に海水公園をつくりあわび館を建てたら、毎年2,200万円の赤字を生み出すことになりました。こういう施設は一度造ると壊すことができません。そこで、観光客誘致のため、たくさん残されている古民家を再生し、ロングステイの基盤にしようとしたのです。

全部で7軒再生して、6軒は宿泊施設にしました。長期滞在をしてもらって初めて地元の還元になりますからね。ただし、一番立派だった藤松家というお屋敷はレストランにしました。京都のような観光地なら行くところは多くありますが、小値賀の夜はシーンとして、どこに行けばいいかわからない。そこで、ちょっとしゃれた空間を造ったのです。

どんな風に再生したか、広い土間の改修について一例を紹介します。天井が低いので、最初は通路にしかならないかと思いましたが、何十畳もある広い空間なので、なんとか使いたい。それに、ただレストランにすればいいじゃなく、どこか楽しい部分も造らないと面白くないと思い、いろいろ考えました。

最終的にタイにあるレストランを参考にして、長さ 7mもあるロングテーブルを入れてパーティなどができる空間に造り変えました。天井が低かったので掘り炬燵にしました。一見すると日本間ですが、実際は椅子に座る感覚で、のんびり過ごせるスペースになりました。

古民家を再生する場合、私はプロデューサーとして、「この家にはこういう特徴があるからこうしよう」などと提案します。パズルみたいなもので、家が元々持っている、「こうでありたい」という声が聞こえてくるんです。同時に、現代人が気持ちよく感じるような快適で便利な部分も取り入れなければいけない。その辺のバランスをどうとるか、家ごとに必ずチャレンジがありますね。

例えばこの家は、元は農家なので板の間の作業場的な空間がありましたが、物を取り払ってきれいにしました。こちらは最初、中央に柱があるからテーブルは置けないと言われましたが、それなら柱を取り囲む形でテーブルをつくろうとか、いろいろ工夫しました。

とにかく、小値賀はかわいい街で、まだまだ元気になると思います。最後に少しだけ宣伝です。簾庵は6月末に、祖谷は5月末と7月に4軒が完成します。「NPO 法人簾庵トラスト」のWebサイト(<http://www.chiiori.org/jp/>)でご案内していますので、ぜひいらしてください。以上で終わります。ありがとうございました。

## Q&A

**Q1:** カーさんがリノベーションされた施設には、日本の典型的な照明や空調器具など近代的なプロダクトデザインのものが一切見えません。

**A:** そういうものは排除ですね。家に合うものを一生懸命に探して入れています。けっこう面白いものを手がけているメーカーやお店はあるものです。

**Q2:** 物学会のメンバーの中には家電メーカーの方も大勢います。カーさんから見て、こんな家電製品が生まれると、日本人の生活ももっと美しくなるのに、という点があれば、教えてください。

**A:** 皆さんには、もう少しスティーブ・ジョブズに倣ってほしいと思います。今の家電製品はボタンがありすぎ、色が派手すぎ、形が複雑。でも、本来、すっきりとしたものをつくるのは日本のお家芸じゃないですか。抽象的でシンプルなものづくりが世界的な評判を得ているのに、探そうとすると意外に少ない。ないわけではないけど、特に家電の世界では主流ではないですよ。

**Q3:** 町の景観を守ろうとするには、最終的には地元の意識を高めることが大事だと思います。そのためには、どんな努力が必要でしょうか。

**A:** 一番肝心の質問ですね。というのは、ヨーロッパの町がきれいに残ったのは観光目的ではなかったからです。地元の人たち自身が町にプライドを持ち、愛している。だから、残そうと努力するし、変なものをつくろうとすると排除しようとしません。でも、京都には古い町家に住んでいることを恥ずかしいという意識があり、お金さえあれば、モダンな家に造り変えたいと思っている。ほとんどの田舎も同じでしょう。

残念ながら、プライドを持ってといっても不要だと思う人には通用しません。だから、私の「古民家再生プロジェクト」には目的が2つあって、1つはホスピタリティ事業として成り立たせること。もう1つは自分の町に対する関心がない多くの日本人に対して、私たちがやって見せるためです。町に刺激を与えることで地元の人々の見方が変わり、活発な市民運動に変っていく。そういうことを願ってやっています。

実際に京都では、私が10軒の町家再生を終えて会社をやめた時点では一切なかったのに、先月調べたら、うちを真似た会社が7、8社できて、すでに120軒の町家が再生されていた。つまり、お客がきているということですね。こうしてお金が生まれ、観光業として成り立つという刺激を受けて初めて、「ひょっとしたら、これは素晴らしいものではないか」と住民も違った目で見えるようになるのです。

以上

2012 年度第 1 回物学研究会レポート  
「明珠在掌——環境共生から生まれる新たな価値」

アレックス・カー 氏

(アジア文化研究家、著述家)

---

写真・図版提供

01 ; 物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2012 BUTSUGAKU Research Institute.